

# 下克上寝取られ4

自慢の彼女が巨根デブオタに寝取られる！  
初旅行の混浴温泉で偶然すれ違った巨根に  
愛する恋人が釘付けに



玉子王子 著

## 1章 恋人が他人のデカマラを凝視する

「ごめんなさい」

大学の一角。

目立たない場所に、男女が向かい合っていた。

若い女が頭を下げる。かなりの美人である。

離れた所で見ている若い男。

頭を下げられている男より背も低いし、顔も普通だ。

しかし、美人を付き合っているのはこっちのほうだった。

男が、自分の方がいいと力説していた。

恋人がいると知っていて、横取りしようと声をかけてきている。

それを知っても、ミキトラは黙っていた。

ちょっかいかけてきている相手がどう考えても自分よりいい相手だからだ。

文句を行って引き離しても、心が離れては意味がない。

黙ってみていたが、今きっぱり恋人はそのどうしようもない男をフット。

見栄えがいいのをいい事に、余所の女を横取りしようとする男。

いずれ天誅が下るだろうが、そんなことより恋人がきっぱり断ってくれたことが幹寅は嬉しかった。

——清江、愛してる。

黙ってみている所から、気弱そうに思えるが幹寅はそういう人間とは対極に近い。

中学から女を抱いて、切らせたことはない。

清江に振られても、別の女をすぐ見つけられるつもりだった。

だからこそ、条件がいい男が現れたならほうっておこうと思ったのだ。

だが、今キッパリ断ってくれた。

それほど、自分を愛しているということだ。

それでも、やはり振られたら振られたで、女を切らせた事がない自分だ、すぐに別のを見つけると幹寅は軽く思っていた。

が、それは間違いだった。

幹寅は今、ヤリチン人生の中で始めて本当に女を好きになっていた。

思えば、浅い付き合いをしてきたのは振られたら怖いという思いがあったからだろう。

自分が女に相手にされるのはそれなりのランクだからで、上のランクのが女に声をかければそちらにいくに決まっていると思っていた。

だが今、その信念がいい方向に裏切られた。

本当に、愛していい相手なのかもしれないと思う。

数日後から、連休が始まる。

クズ男はそれを見越して、清江を確保して何処かに遊びにいこうとでも思っていたのだろう。  
だがそれは叶わなくなった。

清江は予定通り、幹寅と初めての温泉旅行に行くのだ。

——俺は幸せだよな。三十でも童貞のやつだっているんだ。それに比べて、学生時代から女と温泉旅行だ。

ランクが高い人間。

しかも、それ以上の人間が現れても、靡かない恋人を持っている。

これほど幸せなことはないと、心から思えた。

数日後、幹寅は清江を連れて予定通り温泉街に来ていた。

うさぎ県は『質を問わなきゃ大体何でもある』といわれる県で、もちろん温泉街もある。

山の奥のほうにいくつも開かれている。

湯気に包まれた雰囲気は独特だ。

「湯気が染み付いてむせるな」

「そう？」

適当な会話をしながら、予約していた宿に入る。

温泉は、混浴だった。

知っていて予約した。

見せ付けてやりたいのだ、自慢の彼女を。

美人で、巨乳で性格もいい、しかも幹寅を強く愛してくれている。

いや、愛云々は最近確信したことで、予約したときにはそこまでは思っていなかったが。

「え、混浴なんだ」

「男女別のもあるけど、一緒に入りたいから。それに、混浴とか入ったことないし」

入りたい、と示せば、あえて反対する性格でもない。

それに、口には絶対に出さないが清江も自分の体には自信がある。

それを、幹寅は感じ取っていた。

「もう、しかたないね」

「うれしいよ。かわいい彼女、皆に見てもらえて」

「そんな、見られるなんて……でも、いいのかな？」

少し心配そうな顔をする。

「一人で来てる人とか、嫌な気持ちにならない？」

「馬鹿、一人の奴が混浴なんか来るかよ。来るとしたら、見に来るんだ。見せてやれば喜ぶって」

普通ならそうだろう。

だからちょっとしたお遊びでしかない。

「でも、幹寅はいいの？」

「何が？」

「なにがって、おチンチ〇よ」

「見られて恥ずかしいかよ。子供じゃないんだから」

大きいとはいわれてないが、小さいともいわれていない。

だから普通なのだと、幹寅は軽く考えていた。

しかしそれは違った。

彼が簡単に落としてきた女たちは皆経験者ばかりで、彼の一物が平均以下どころか、下位数パーセントらしいことにすぐに気づくも、決して口に出すものたちではなかった。

それこそ、C学校で付き合った同級生でさえも、彼の男に気を使う大人だった。

それは清江も同様だった。

前の彼氏の半分以下の体積しかない彼のものを見ても、顔色も変えなかった。

愛がどうという話ではなく、女の嗜みである。

——凄いわ。やっぱり幹寅は。普通の男なら、あんなにおチンチ〇が超信じられないぐらい、ちょっとびっくりするほど小さいなら混浴なんて入りたがらないのに……全然気にしないんだから、やっぱり好き、幹寅のことが……。

混浴で決まりだ、と泊まる予定の部屋を出て行く幹寅の背中に熱い視線を向ける清江。

条件のいい先輩を振ってよかった、と思う。

この程度のことで感動するのは、元から好きであるためだろう。

この程度である上に、誤解でもある。

幹寅は、まさか自分のモノが下位数パーセントとは思ってもいなかった。

女たちが自分を慮って、気づかないように振舞ってくれたなど、思ってもいない。

脱衣場はわかれている。

ほとんど人がいないが、一人いた。

年齢は幹寅と同じぐらいだが、背は平均以下、横幅だけ必要以上の色白の男。

——なんだ、デブオタってところだな。

チラッと見て、あっさり見下す。

上と見た相手に女を取られなかったことで感動し、愛を実感した幹寅。

もしもそうして下と見なした男に女を寝取られたとしたら……

その衝撃はどれほどになるだろうか。

さっさと浴場に向かう幹寅。

その後ろで、デブオタがパンツを脱ぐ。

ブルン、と巨大すぎる肉棒が揺れる。

幹寅の立ったもの何本分か、長さだけ比べても三倍近いものだった。

見なかった幹寅は幸運だっただろうか。

中に入ると、三十人ぐらいの男女がいた。

幹寅が考えたとおり、大体男女ペアかグループだ。

だがなぜか、男女で固まった単独のグループもある。

混浴場の方が広いから、というのが表向きだが、やはり何か期待していると考えられないだろうか。

——さもない連中だ。

吐き捨てるように思いつつ、入っていく。

幹寅は流石に前はタオルで隠しつつも、絶対見られたくないなどとは考えもしない。

その、横から見れば股間が丸見えの幹寅がまさかそんな超短小だとは周りの者は思いもしない。

股間にだけタオルをかけ、爆乳はそのままむき出しの熟女がチラッと横を見る。

その目に、横を通る幹寅の男の部分が入る。

——まあ、大胆ね。おチ○ポ丸出し。キ○タマプルプルしてるわ。

薄っすらと微笑む熟女。

男の股間を見て笑うのは危険なことだと当然熟女であるから理解している。

だから気づかれない程度の反応だ。

別に、小さいと笑っているわけではない。

横目で見えても、ごく自然に振舞っているので気づかなかった。

大きくはない、と大まかに理解したに過ぎない。

まして、落ち着いて股間を見たりしない若い女や、見たくもない男たちに気づかれないのは当然だろう。

体を洗い、入ろうとしている間に、声が挙がる。

「おお、可愛い子だな」

「まさか一人か？ オッパイデケエ」

「男いるに決まってるって」

男たちのひそひそ声を聞いて、勝ち誇った笑みを浮かべる幹寅。

——お前らと俺とじゃ、身分が違うんだよ。女にもてるのは、中学までにやった奴だけ。

思いながら、立ち上がる。

「清江、こっち」

タオルが落ちる。

まったく、誰の得にもならないポロリ。

プルン、と分厚い皮に包まれた小指が揺れる。

……それで彼に「自分のは人並み」だと思わせてくれた今まで付き合った女たちは女神ぞろいではないだろうか。

彼氏がいたのか、と思わず見た男たちが面食らう。

幹寅の一物のあまりの小ささと、それを一切隠さないどころか、注目が集まる場でタオルを落としても大して気にしない姿に。

「何だあいつは……」

「すげえな」

「普通ああは出来ねえよ」

小声だが、耳のいい幹寅には聞こえる。

——おいおい、あんな彼女がいるからって、褒めすぎだろう。

そこではない。

「あの子凄いわねえ、超短小チ○ポを平然と晒すなんて」

「本当よねえ、きっと無茶苦茶エッチ上手いんでしょうね。でなきゃあんな短小チ○ポじゃ混浴に入るのは無理よ」

「っていうかレツ○シヨルダ一級に上手くても普通出てこれないでしょ、あの大きさじゃ」

「どういう等級よ」

熟女たちは離れているので、幹寅にはまったく聞こえない。

近くにいる男たちは、流石に「あんな小さいのに堂々としてかけー」とはいえない。

そういう覚悟ある振る舞いとしか思えないが、それをはっきり口にするのは憚られた。

だから、幹寅は気づかない。

座り、雄々とタオルをまた巻く。

横に清江が座る。

頭を洗うと、ブルンブルンと肉スイカが揺れる。

ズル、と巻いていたタオルがずれてピンクのサクランボ二つが剥き出しになる。

横目でチラチラ見ていた男たちの目が釘付けになった。

——へへへ、もっと見ていいんだぜ？ 俺は好きに出来るけど、お前らは見るだけだからな。

「み、幹寅」

手が離せないなので、タオルを直してくれとって来る。

「いいじゃんかよ」

「馬鹿、恥ずかしい……」

「綺麗だよ」

「馬鹿ね……」

顔を赤らめる清江。

グン、と幹寅のタオルの下が力強くなる。

僅かにしか持ち上がらないが、本人にとっては大いに力強いのだ。

——たちやった、出たらすぐやらないと。周りの連中はどうかな？

女連れは、それほど見せてもらえない。

男だけの連中は、やらせてくれる相手がいないのだ。

ままならない話だ。

と、目の端に何かはいる。

一人、木製の椅子に座っている男。

「デブオタ……」

デブはともかく、オタクかどうかはわからない。

しかし幹寅の頭の中ではその巨根男は「デブオタ」と決め付けられていた。

彼もまた清江をチラチラ見て、あっさりギン立ちしていた。

幹寅の見立て通りろくにモテないデブのオタクで、何とか完全童貞ではないものの、女といえば金で買う風俗嬢だけの人生。

大学生の幹寅と奇しくも同じ年だが、高校を出てすぐしょぼい会社の事務として就職し、特に明るい未来があるでもない。

ごく普通の人生ならありうるが、それは可能性としてだ。

見栄えが悪く、女にもてないのでは普通程度の収入で結婚できるか。

そんな心配を、もちろん幹寅はしない。

眉を顰める。

——あんな奴にまで見られてたのか。

舌打ちする。

ほかの普通のにならいいが、デブオタにはダメ。

そんな差別的な考え方など褒められたものではないが、彼にとっては当然のものだった。

ああいう男に見られるのは、清江にとっても自分にとっても損害を受けているときえ思う。

そんな風に考えられている事など、デブオタは知らない。

巨根が反り立っているのを、タオルを胸の近くまで不自然にかけて誤魔化しているばかりだ。

不思議と、まわりは気づかない。

注目される所か、むしろ気づかれないタイプの間人だからだろう。

だがだからこそ、幹寅のようなある種の間人にとっては、一度目に付くと癪に障る。

急に現れたように感じられるのだ。

——ムカつくぜ……

思いつつ、風呂に入る。

それなりに楽しく過ごし、そろそろ出ようと立ち上がる。

と、まだデブオタがいるのに気づく。

——なんだ、まだ見る気かよ。

一旦湯船に入り、また上がって椅子に座ったのを幹寅は見ていた。

むしろ、すでにデブオタは清江のほうを見ていない。

ただ温泉を楽しんでいるが、幹寅のほうは相手が気になって仕方がなかった。

その割りに、巨根には気づかない。

気づいていれば、近付かなかっただろう。

が、気づいてないので近付いてしまう。

デブオタの近くを通ろうとする。

不自然だな、と思ってもついていく清江。

パン、と足で音を立てる幹寅。

気づいてそちらを見るデブオタ。

それに目を吊り上げる幹寅。

「お前、俺の彼女見ただろ！」

「え？」

「えじゃねえよ！ 立て！」

腕を掴み、引き上げる。

清江がいきなりの揉め事に真っ青になる。

「ちょっとやめて！」

「なんでだよ、俺はお前……」

どうしようもない台詞が止まる。

目が、一点を凝視していた。

腕を引っ張られ、引き上げられたデブオタ。

腕を引っ張られ、引き上げられたデブオタ。  
とっさのことでタオルは床に落ちていた。  
太っとい太股。  
その間の、

**長く太っとい一物。赤ん坊の腕ぐらいはあった。**

パサ、と幹寅のタオルも落ちる。

**小指ぐらいの大きさの一物。**

清江が絶句し、ほとんど

**女の本能でその二本を見比べる。**

——な、何これ……この人、おチンチ○大きい。

改めて見比べたら、幹寅のが小さいってよく分かるわ。

明らかに、短小だもんね。

だからどう、ということはない、ないはずだ。

だが、途中から見比べるのをやめ、

清江は巨大な男の部分を凝視していた。

それに幹寅が気づいて、一瞬呆然と恋人を見る。

それに気づかず、ただ

**恋人よりも遙かに力強い肉根を見続ける清江。**

幹寅の顔から血の気が引く。

とっさのことでタオルは床に落ちていた。

太っとい太股。

その間の、長く太っとい一物。赤ん坊の腕ぐらいはあった。

パサ、と幹寅のタオルも落ちる。

小指ぐらいの大きさの一物。

清江が絶句し、ほとんど女の本能でその二本を見比べる。

——な、何これ……この人、おチンチ○大きい。改めて見比べたら、幹寅のが小さいってよく分かるわ。明らかに、短小だもんね。

だからどう、ということはない、ないはずだ。

だが、途中から見比べるのをやめ、清江は巨大な男の部分を凝視していた。

それに幹寅が気づいて、一瞬呆然と恋人を見る。

それに気づかず、ただ恋人よりも遙かに力強い肉根を見続ける清江。

幹寅の顔から血の気が引く。

「お、おい行くぞ」

手を放し、踵を返す幹寅。

歩きながら、股間を隠すものがないと気づく。

手で押さえる。簡単に押さえられた。

デブオタには無理だろう。思うと、頭が真っ白になる。

——嘘だ、あんなデカイ奴がいるなんて……人間かよ。あんな、デカイ……女はどうなんだ？ デカイ方がいいのか？ いや、そんなわけねえよな！

唾を飲む。

清江は、明らかにデブオタの方に関心を持っていた。

始めこそ、見比べていた。

だが途中から、巨大なほうばかりを見ていた。

——まさかアレが欲しいってんじゃないだろうな？

ありえないことだ。

ありえないはずだと必死で思い込む。

夜、珍しく……というより始めて幹寅は立たなかった。

「飽きてきたのかもな」

そう冗談めかして言うと、慰めていた清江が押し黙った。

——なによ、そんなこという？

恨みがましく見る。立たないのは男のせいではないか。少なくとも、若くて美人が協力的に抱かれようとしているのに、健康な男が立たなければ、それは男のせいだろう。

そこまで女のせいにされてはたまらないと清江は思う。

普段なら自分が悪い、とさえ言うかもしれない清江。

だが先手を打って文句めいたことをいわれればまた別だ。

眉を顰める幹寅。

——なんだよ、まさかチ○ポ小さいくせにえらそうに、とでも思ってるんじゃないだろうな？ あのデブのはでかすぎるんだ、俺のが小さいわけじゃねえ。

と、思う。

しかし頭の端では、いろいろな記憶が蘇ってきていた。

さりげなく横で立ちションしている友人のを見たとき、一人でも自分のより小さい所か、同じとすら思ったことはなかったのではないか。

悩む。

自分は短小ではないか、という悩みは男にとっては巨大だ。

だが、女にはよく分からない。

何を押し黙っているのかわからない清江は、上手く出来ないことで怒り、それを自分にぶつけてくるつもりかと不安になる。

仕方なく、浴衣を着て部屋を出た。

「馬鹿馬鹿しいわ……」

愛し合っているつもりだった。

だが、大人しいほうではない幹寅は、一度不機嫌になれば気を使ったりご機嫌を取らねばならない相手になる。

本当に対等に愛し合っているのか、寒い中部屋を出た清江は少し疑問を抱く。

と、その前を通るのはデブオタだった。

「あ、巨根」

とんでもない発言に、自分も驚く清江。顔を赤くする。

「え？ あ、さっきの」

「ごめんなさい、さっきは連れが。あの人、おチンチ〇ああでしょ？ 大きい人には嫉妬しちゃって」

笑う。

あまり人と打ち解けないデブオタ、特に相手が美人なら。

しかしこのあまりにも無茶なネタには逆に笑ってしまう。

デブオタのほうも浴衣姿だ。

こころなしか、股間がかなり膨らんでいるように清江には思えた。

——大きいからって、意味はないのよ。多分。なのに男は気にして、馬鹿よ。

考えつつ、気づく。

幹寅の普段と多少違う振る舞いは、それが原因ではないかと。

——そうよ、幹寅のは明らかに小さいのに、目の前にこの人の超巨大なのが現れたら、変になるのも当然よ。

多少同情もわいて来た。

なんとなく話しながら、デブオタと歩く。

デブオタの部屋の前に来る。

よかったら、となんとなく中に誘われる。

女と付き合ったことがないデブオタは、そういうのは誤解を招くからよくないとよく分かっていたなかった。

先ほどわけのわからない理由で因縁をつけてきた男の彼女となればなおさらそういうのは避けた方がいいだろう。

そういうことがまったくわかっていないらしい姿に、清江は呆れつつも新鮮なものを感じた。

美人だけに、そういうのを相手に出来るランクが高いものばかりと付き合いしてきた。

その中で、幹寅は結構素朴でいいと思った。

一物が極端に小さいのに、気にしていない感じなのも良かった。

だが、それがかなり幻想だったのではないかと思い始めていた。

「そうね、ちょっとだけなら」

そういって、部屋に入る。

一時間ほどして、清江が帰ってこないことを流石に気にし始めた幹寅。

スマホも置いて行ったので、探しに出るしかない。

夜中、廊下を歩くといろいろな声が聞こえてくる。

旅館の仕切りは障子などで、寝るところは奥とはいえ、完全に密閉も難しい。

——ちっ、皆やってやがる。でも、あのデブはやってないだろう。ざまあみろ。あんなの一生童貞だろ。

思いながら、そのデブの部屋の前に来る。

別に、そうだと知っているわけではない。

探し回った流れで、通りかかっただけだ。

と、その部屋の置くから声が聞こえる。

「え？」

聞き覚えがある甘い声。

障子に耳を近づける。

「あっあっあっあっ、大きいっ、おチンチ〇大きいよっ！ 奥に届いちゃうっ、こんなの初めて。ああ、ほんとに太っといから、入ってるって気がする……凄いつ」

手足が震え始める。

嫌な汗が噴出した。

——なんだ、こんなこと、あるわけない。

愛し合っているはずの恋人だ。

数日前も、将来いい会社に転がり込むだろう優秀で見栄えのいい先輩に告白されたが、断っていた。

幹寅のことを愛しているはずだ。

だから、ランクの高い相手を断ったはずだ。

「まさか、もっといいランクの奴が出てきたのか？」

愛を上回るほどに。

幹寅にとって、所詮「愛」は数字で換算できるものだった。

それでも、愛してはいる。

心が貧しい人間なりに、愛してはいるのだ。

だから、震えた。

震えながらも、部屋に入る。

確認せずにはいられなかった。

本当に恋人なのか。

「いいっ、おチンチ〇いいっ！ ああっ、そこ、ゴリゴリして！ ああん、オッパイ揉んでよ、切ないよ。ああん、デカチ〇ポ休まないで！」

よがりながらも、足りない部分に文句ばかり。

下手な相手だ。

それに、少し癒される幹寅。

だが、それ以上に、衝撃を受ける。

明らかにその声は、清江のものだった。

——なんでだ、そんなランクが高い男なのか？

セックスが上手いはず、追い出された所に都合よくいい男が現れ、声をかけてベッドイン。

そんな女のはずがない。

仮にランクの高い男に靡いて後で別れるにせよ、この場では筋は通すはずだ。

そう思いたい、現実には。

やっている部屋に近付いていく。

と、荷物に目がいく。

——なんだこのカバン？

巨乳の女五人がプリントされたどう考えても大人が持つようなものではない。

——金責め戦隊デカパイジャー？ 頭がおかしいのか？

と、急に気づいた。

この部屋が誰の部屋か。

急に気づいてしまった。

情報は、清江の相手の一物が巨大ということ。

そして子供っぽいカバンを持っているということ。

ただそれだけだが、突如幹寅は確信してしまった。

そして、それは当たりである。

「あああああっ！ デッカイ！ おチンチ〇デッカイいい！ 大きいのがこんなにいいなんて……大ききなんて意味ないと確かめようとしたのにこんなっ……」

「いいっ、いい、風俗とはぜんぜ違う。普通に出来るって最高……」

「私がいいんでしょ?!」

「清江さん今まで百人以上としてきたけど、最高だよ」

風俗ばかりだ。

それは、清江にもなんとなくわかった。

それでも、プロ百人よりいいといわれて悪い気はしない。

清江の声ははっきりとわかった。

そして、大して聞いていないが男のほうの声も、デブオタのそれだとわかる。

幹寅は、唇を噛む。



——俺が、チ○ポなんか気にしたから……意味ないと確かめようとしてこんな……  
項垂れる。

文句を言おうかと思ったが、やめた。

ここで出て行ってしまえば、確定する。

自分の粗末な一物よりも、底辺のデブオタの巨根の方が気持ちいいと。

だが、気づかない振りをすれば、今日のことはここで終わりなのだ。

街に帰れば、日常が戻ってくる。

「あひっあひっ、いい、いいのおお！ あの人の短小チ○ポと全然違う……あ、あっ、んん、もう、もうダメかも……」

耳を塞ぎたくなるような声を背中に受けながら、部屋を出る。

と、いつの間にか、浴衣の下が突っ張っているのに気づく。

——なんで立ってるんだよ、今。

さっき立ってれば。

ほんの一時間前に一物が立ってれば、こういう展開にはなっていなかったはずだ。

よろよろと歩きながら、部屋に戻る。

黙ってれば、すべて解決する、そのはずだ。

そう思って、布団の中で無理に目を瞑る。

一物はまだビンビンだった。

——あの人の短小チ○ポと全然違うだと？

それは明らかに幹寅のこと以外にありえない。

涙が滲む。

しかし、一物はやはり張り裂けそうだ。

パンツに手を突っ込み、握る。

風呂で見たデブオタの巨棒が反りあがり、清江の女の割れ目を極限まで広げるのを想像する。

こんなの入れられたら、もう小さいのは相手に出来ない。

そうって、横にいる幹寅を蔑んだ目で見てくるのを想像する。

——畜生、こんな想像で俺がオナニーだと……気持ちいい、何でこんなに気持ちいいんだ。

チョコチョコと、悲しくなるような小さな動きを摘まんだ指にさせながら、涙で枕を濡らす幹寅。

それでも、その自慰は下手をすればどんなセックスよりも気持ちいいほどだった。

体験版終わり

この後、そ知らぬ顔で旅行から帰る二人。

何事もなかったことになるはずが、偶然清江がデブオタと再会してしまうところから偶然が重なり、ついには負けオナニーに向かう幹寅。

続きは製品版で